

おかげさまで5000号!!

「広報たこ」の足跡をたどる



創刊 広報たこ第1号は昭和46年6月1日に発行

昭和46年6月1日に創刊された「広報たこ」。町政の状況やホットな話題など、町民ニーズを的確に反映し、わかりやすく親しみやすい「をモットー」に作られ、みなさんにお届けしてきました。時には、鋭い視点から問題を投げかけた特集を掲載したり、町民全員の登場を目指した企画を展開したり、内容はその時々を担当者によってさまざまですが、今まで一度も休刊することなく発行されてきました。

今月号では、44年間続いてきたその歴史を振り返り、広報たこの歩みをちよっと違った視点からみなさんにご紹介したいと思います。

題字の変遷

「たこ」から「多古」へ、そして再び「たこ」に

題字の移り変わりを調べてみました。第1号から第5号までは「たこ」と平仮名で、第6号から第8号までは「多古」と漢字。しかも8号までは、職員が創作したものでありました。第9号からは、成田市に在住し、大原内に書道教室を開いていた書家の金杉龍峰氏の毛筆によるもので、昭和53年の第62号まで続きました。ちなみに、表紙に町章が入ったのは第30号から。第63号から78号までは、金杉氏の毛筆を基にデザイン化されたものが使われ、第79号からは活字の「多古」が平成元年4月の第195号まで続けました。そして、第196号からは、再び平仮名の「たこ」に戻り、平成8年4月の第279号からは現在のデザインが続いています。5000号という歴史の中で、今のロゴマークが一番長く使われているんですね。

B5判



ここでもちよっとクイズ!!
今までの広報紙を見返してみると、いろいろなコーナーがありました。例えば、町民全員登場を目指した突撃レポート企画「ぐるりんば」、多古の昔話を紹介する「郷土史」、新人職員やサークル活動、学校行事などでのインタビュー「みんなあつまれ」、結婚50周年と新婚さんを紹介「金婚館・新婚館」、「俳句・短歌」などなど。

では、現在も続いている一番の長寿コーナーは何だと思いませんか？ 答えは、編集後記を見てね!

知ってますか

大きくなりました

A4判

B5判だったサイズは、平成8年4月号（第279号）からA4判になって見やすくなりました。



1000号へ向かって

戦後の住民自治が叫ばれるなか、行政と住民とを結びパイプ役を果たすため、地方自治体における今日的な広報活動が取り入れられるようになったとされています。昭和29年の町村合併により現在の多古町が誕生してから17年後、情報化の時代といわれるなかで「広報たこ」は誕生しました。

5000号を迎えた今、広報紙とは何を伝えるべきか？ という基本を外れることなく、読まれ・愛される広報紙作りを目標に今後も尽力していきたいと思えます。

表彰の歴史

広報たこは、情報提供をしていたり突然の取材にも親切に応じてくれたみなさんのご協力と町への想いなくしては創ることはできません。そんな町民の方々の想いが詰まった広報たこは、広報コンクールにおいて、千葉県はもとより全国でも高い評価を受けた実績があります。今までの主な受賞歴をご紹介します。

■ 総務大臣賞ならびに町村の部1特選（全国1位）

平成2年10月号 第213号
特集「不減なれ多古米」
流通量の少なさから「幻の米」と称されることもある多古米。全国的に進むコメ離れと激減する農業後継者、多古米がさらされている危機。その現実と、今後どうしていったらよいかを特集した企画。



■ 町村の部1特選（全国1位）



平成12年12月号 第335号
特集「どうなっちゃう農?」



平成15年5月号 第364号
トーク特集◎いろんな人に聞いてみました「多古町らしさ」って何?

多古町に生まれ、このまちで働く人たち。20代から50代までの方々、あるいはこのまちに縁あって転入してきた人、このまちを離れて暮らすようになった人に「多古町らしさ」を話してもらった企画。また、折は平成の大合併の時期、昭和29年の町村合併を知る方々と各年代の方々に未来の多古町について望むことを聞いた。

